

國學院大學學術情報リポジトリ

話し言葉データにおける格助詞性複合辞の使用状況：
座談会・インタビュー・講演録を利用して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学日本語教育研究会 公開日: 2025-07-02 キーワード (Ja): 話し言葉, 格助詞性複合辞, 座談会, インタビュー, 講演録 キーワード (En): 作成者: 丁, 文静 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001734

話し言葉データにおける格助詞性複合辞の使用状況

—座談会・インタビュー・講演録を利用して—

丁文静

【キーワード】：話し言葉、格助詞性複合辞、座談会、インタビュー、講演録

1. はじめに

複合辞とは、「いくつかの語が一まとまりになり、その一まとまりが固有の『付属語』（辞）的な意味を担うものとして用いられる形式」（山崎他 2001,p.1）である。「について」「かもしれない」等がその例である。助詞・助動詞相当の機能を持つことから、「複合助辞」「複合助詞/複合助動詞」ともいわれる（『日本語学事典』等）。複合辞は現代日本語において多用されている。

丁（2023）では、日本語アカデミック・ライティングにおける格助詞性複合辞の使用実態に注目したが、本研究では、これと比較するために、座談会等に調査対象を定めた。座談会は話し言葉の資料ではあるが談話そのままではなく読者に理解しやすいように話者・編集者等によって文として整えられている可能性があるところに却って資料価値が認められるため、あえて言語資料として取り上げ、格助詞性複合辞の使用実態を調査することにした。その上で、日本語教育の場での格助詞性複合辞指導の可能性を探りたい。

2. 複合辞の定義と分類について

複合辞の定義について、森田・松木(1989)は、「いくつかの語が複合して、ひとまとまりの形で辞的な機能を果たすものを『複合辞』」と述べている。また、森田・松木(1989)と松木(1990)は、意味機能により複合辞を助詞性複合辞と助動詞性複合辞に分類し、助詞性複合辞をさらに係助詞性複合辞、格助詞性複合辞、副助詞性複合辞などに分類している。

その上で、格助詞性複合辞をさらに分類した下位分類として、以下の【表1】に示すように、AからIまで9種類にまとめている。本研究ではこれに基づき、【表1】に示した格助詞性複合辞44種類¹（異なり数）を調査対象とし、考察を行う²。

【表1】意味機能による格助詞性複合辞の分類

（森田・松木(1989)、松木(1990)による）

格助	A	資格・立場・状態・視点	として、をもって、でもって、にとつて、からすると、からすれば、からして、からいうと、からいえば、からいって、からみると、から
----	---	-------------	--

詞性複合辞			みれば、からみて、からみたら
	B	対象・関連	について、につき、に関して、に対し(て ³⁾ 、をめぐって、にかけて(は・も)、にかけると、にかけても、につけて)
	C	仕手・仲介・手段・根拠・原因	によって、により、によると、によれば、をもって、でもって、を通して、を通じて、にして、につき
	D	時・場所・状況	において、にあって、にあたって、に際し(て)、(の)折に、(の)折から、につけて(て)、にして
	E	起点・終点・範囲	からして、をはじめ、に至るまで、にかけて、を通じて、にわたって
	F	基準・境界	をもって、でもって
	G	対応	によって(は)、により、によったら、によると、によらず
	H	割合	について、につき、に対して
	I	同格	との、という、といった、ところの

3. 言語資料(コーパス等)における格助詞性複合辞の状況について

一般的に、格助詞性複合辞は、書き言葉、もしくは、フォーマルな場面で多数使用される。書き言葉における複合格助詞に注目した研究は、BCCWJの教科書データにおける複合辞の使用状況を調査した渡辺(2016)、日本語アカデミック・ライティングにおける格助詞性複合辞の使用実態に注目した菅谷他(2016)、安(2018)、丁(2023)が挙げられる。話し言葉における複合格助詞に注目した研究には、服部(2013)、本多(2017)が挙げられる。服部(2013)は、『国会会議録』と『日本語話し言葉コーパス』のデータに基づき、複合格助詞関連形式での丁寧形/普通形の対応関係に着目し、レジスターの違いや通時的な観点から比較し、連用形式や連体形式など、複合格助詞の丁寧形の取り得る形式の多様さについて概観している。本多(2017)では、『日本語話し言葉コーパス』を用い、複合格助詞における丁寧形の機能について、丁寧形と普通形の比較を通して分析を行っている。丁(2023)では、母語話者によって書かれた日本語教育、日本語学関係の学術論文の格助詞性複合辞の全体的な使用状況を調査し、あわせて日本語教育、日本語学、日本文学などの(母語話者によって書かれた)学術論文とも比較し、母語話者によって書かれた学術論文に出現する格助詞性複合辞の出現頻度、異なり語数、また学術論文に用いられている格助詞性複合辞の表記を明らかにした。本研究では、丁(2023)を踏まえ、学術雑誌に掲載された話し言葉の資料となる座談会、講演録、インタビューを取り上げ、学術論文のような書き言葉的な資料との比較を試みたいと思う。

4. 本研究の研究目的と課題

座談会は、言語研究の資料としては速記資料や録音を文字化した資料のなかでは作成者・

発話者等による改変の可能性があるため発言された言語表現を一字一句正確に反映する資料に較べて言語資料として利用価値は高いとはいいがたい。しかしながら、談話でありながら読者に理解しやすいように作成者・発話者等によって必要に応じて口語性を保持しつつ文意の通ずるよう改変がなされるところに言語研究の資料としての利用価値が認められると考えられる。ことに、日本語学習者にとっては、談話でありながらほぼ規範的な日本語表現として整えられており、理解しやすい日本語と考えられる。

本稿は、座談会、インタビュー、講演録を取り上げ、調査を行う。座談会、インタビュー、講演録は同じように話し言葉的な性質があるが、しかし、話し手の人数、形式などには相違がある。調査に入る前に、まずそれらを整理し、以下【表 2】に示す。

【表 2】座談会、インタビュー、講演録について

種類	話し手の人数	形式	主な目的	特徴		敬語の使用
座談会	複数人	対話・討論	多様な意見の提示	原稿なしの可能性	話し言葉的	人間関係の都合で、敬語が出るが、くだけた表現になる可能性もある
インタビュー	基本的に 1 人	質問と回答	個人の内面や経験に迫る			1 対 1 のため、敬語が出る可能性がある
講演録	1 人	独演	知識や意見の伝達	原稿ありの可能性	書き言葉的	使用の程度は講演者の立場・聴衆との関係・講演の場の形式性により相違が出る

座談会は、複数人（専門家、関係者など）が一つのテーマについて話し合う形式である。複数の話者が登場し、意見交換や議論が展開され、談話的な要素が多いため、敬語が場合によりくだけた表現になる可能性がある。

インタビューは、一人または少人数に対し、聞き手が質問を投げかけて答えてもらう形式である。基本的に「聞き手」と「話し手」の二者で構成され、質問とそれに対する回答の形式で進行し、話し手の考えや体験を掘り下げ、話し手の個人的な経験や意見が中心になる。

講演録は、ある人物が特定のテーマについて一人で話した内容を記録したものである。話し手は基本的に一人で、構成は独演形式で、文章化の際により書き言葉に近い整った文になるように編集されることも多い。

本研究では、各大学、大学関係の雑誌に掲載されている座談会に用いられる格助詞性複合辞に焦点を当て、収集したデータを計量的に考察し、全体的使用状況を調査する。その上で、上位に現れるもの、また、使用の傾向と先行研究の違い、格助詞性複合辞の共通点、特徴、傾向を考察する。さらにその使用傾向について解明することを目的とする。また、同じ話し言葉的な性格を持つインタビュー、講演録に出現する格助詞性複合辞との比較も行

うため、フォーマル的な話し言葉に頻繁に使用される格助詞性複合辞と、逆に使用されにくい格助詞性複合辞との異同を明らかにする。

5. 調査対象の選定

話し言葉における複合格助詞に注目した研究には、服部(2013)、本多(2017)が挙げられるが、服部(2013)等が取り上げた『国会会議録』『日本語話し言葉コーパス』のようなデータは、話した内容を忠実に文字化しているため、執筆者が推敲した文章のような規範的な表現で主述が対応した文であるとは限らず、主述がねじれた文や途中で話題を変更して1文をなしていない例が少なからず見られる。『国会会議録』と『日本語話し言葉コーパス』で「に対して」を検索すると、以下のような文として成り立っていない用例が大量に見られる。(下線で「に対して」を示す、波線で問題がある部分を示す)

- (1) 何かその自治省のやった御努力に対して一つの無視と申しますか軽視と申しますか、そういう態度をとられたというふうにはお感じにならなかったでしょうか。

(BCCWJ・国会会議録 OM11_00002 16750)

- (2) 得られた回答にはあの一各刺激語に対して十二から四十種類の連想語のん連想語があつてんでそれでABCのとことうあえー当てはまる回数えー回答数を数えてえーパーセンテージを示しました。

(CSJ・学会 A01F0132 22780)

一方、学会誌や大学等の雑誌に掲載されている「座談会」「インタビュー」「講演録」の話し言葉は、座談会、インタビュー、講演を速記または録音などによって記録したデータを文字化した上で、発言者による修正を経て作成されるのが一般的であるため、話し言葉的な文体でありながらほぼ文として成り立っている。本研究では、座談会における格助詞性複合辞の使用状況を考察するにあたり、『國學院雑誌』の座談会、インタビュー、講演録の三種13編を調査する。また、『國學院雑誌』の座談会の総文字数に合わせ(文字数⁴)、6つの雑誌⁴に掲載の座談会と比較する。以下【表3】に、本研究で調査対象とした雑誌の詳細を示す。

【表3】調査対象とした雑誌の詳細(発行年の昇順による)

調査した雑誌名	発行者	調査内容掲載巻(号)	発行年	調査内容
國學院雑誌 ⁵	國學院大学	第116巻 第1号	2015	座談会
		第117巻 第2号	2016	
		第117巻 第12号	2016	
		第119巻 第2号	2018	
		第120巻 第3号	2019	
		第117巻 第6号	2016	講演録
		第119巻 第4号	2018	

		第 123 巻 第 10 号	2022	インタビュー
		第 117 巻 第 4 号	2016	
		第 117 巻 第 6 号	2016	
		第 119 巻 第 12 号	2018	
		第 120 巻 第 6 号	2019	
		第 120 巻 第 9 号	2019	
The KPUM TIMES	京都府立医科大学	vol.06	2021	座談会
九大広報	九州大学	第 101 号	2016	
		第 121 号	2021	
言語文化教育研究	一般社団法人・言語文化教育研究学会	第 6 巻	2007	
創成	東京大学	第 30 号	2017	
		第 29 号	2017	
		第 28 号	2017	
大学時報	一般社団法人・日本私立大学連盟	7 月号	2023	
		9 月号	2023	

また、本研究では、格助詞性複合辞を手作業で抽出する方法を用いず、考察対象の学術論文を電子テキスト化し、テキストエディタ「mi³」の Grep 機能を使用し格助詞性複合辞のデータを抽出した。手順としては、以下のように示す。

- ① 電子テキスト化した本文を対象に【表 1】にある 44 種すべてを文字列で検索した。
- ② 抽出した用例について、松木(1989)の「格助詞」相当の格助詞性複合辞に該当するかどうか、文脈を確認しながら、手作業で判断した。
- ③ 電子テキストで前処理を行った上で、格助詞性複合辞の使用状況を収集し統計的処理を行った。また、誤差を減らすため、手作業でそれらの正確性を点検し、計量データを確認した。

6. 話し言葉データにおける格助詞性複合辞の使用状況

6.1.概況(全体の説明)表 4、付録 1、付録 2 の説明)

『國學院雑誌』の座談会、インタビュー、講演録、また『The KPUM TIMES』『大学時報』『言語文化教育研究』『創成』『大学時報』における出現頻度が $\geq 10\%$ の格助詞性複合辞の出現状況を調査し、それぞれの出現頻度(延べ)、異なり出現数を以下の【表 4】に示す。また、資料として一覧を本論文の末に(付録 1,2)掲出する。

【表 4】上位に出現する格助詞性複合辞(出現率 $\geq 10\%$)

資料名	出現頻度 (延べ)	異なり 出現数	出現率>10%の格助詞性複合辞 (多い順)
『國學院雑誌』座談会	282	20	について、との、において、によって
『國學院雑誌』インタビュー	113	21	について、によって、との、にとって
『國學院雑誌』講演録	92	16	によって、について、にとって、との
『The KPUM TIMES』	9	3	について、との、にとって
『九大広報』	16	8	について、との、といった
『言語文化教育研究』	25	10	によって、について、にとって
『大学時報』	71	12	について、に関して、において、との、に 対して
『創成』	52	13	について、との

6.2.出現率 10%以上のもの(よく見られる、頻出するもの)

ここでは、それぞれの資料を比較したときの共通点と相違点について検討を加える。まず、各格助詞性複合辞の出現頻度から見ると、『國學院雑誌』座談会、インタビューともに「について」の出現頻度が最も多く見られる。しかし『國學院雑誌』講演録の出現頻度の数は、「によって」「について」「にとって」「との」という順が見られ、最も多く見られるのは「によって」である。

『國學院雑誌』の講演録では、以下の用例のように、「言語接触によって」「ナショナリズム政策によって」「日本語によって」のような、原因・理由、また根拠・基準・観点などを表す用例が多く出現している。「によって」には手段、原因、根拠などさまざまな使い方があるため、座談会、インタビューのような出来事、考え、結果などを語る場面ではよく使われる。

- (1) 日系移民によって世界で最も日本語が継承されている国ブラジルでの日本語教育の現状、とりわけ博士が研究しておられる日本語とポルトガル語との言語接触によって日系人の間に生まれる様々な中間言語や、ブラジルにおける日本語の保持・継承の意義、日本語教育の問題を通して広くグローバル化する世界での第二言語習得についてのあり方を視野に入れた社会言語学的な議論を深めることが目的である。

(『國學院雑誌』講演録/第 119 巻第 4 号 p.20)

また「について」は、日本語学習者にとって最も使用されている格助詞性複合辞とも言えるが、「に対して」「に関して」と混同しやすく、日本語学習者の間違いやすい格助詞性複合辞の一つとも言われる。今回の調査資料である『國學院雑誌』の座談会、インタビュー、講演録ともに、「について」の出現率が 10%を超えている。格助詞性複合辞「について」は文全体のテーマを提示し、後に言語活動、思考活動、認識活動、調査、研究、感情、関係性などを現す述語が来ると思われる。

「において」は『國學院雑誌』では座談会にのみ多用され、インタビューでは 1 例、講演録では 2 例見られるだけである。「において」は動作・作用の行われる時・場所・場合を

表す場所・場面・状況・分野・方面に関して使われると思われるが、改まった書き言葉で使われており、日常的な話しことばではあまり使われないとされている。

- (2) 文献研究や作品注釈は、今日においても基本的なスタイルで継承されております。

(『國學院誌雑』座談会/第 116 巻第 1 号,p.286)

- (3) 古典学を標榜します國學院大學が日本の古典においても然りだと思うのです。

(『國學院誌雑』インタビュー/第 120 巻第 6 号,p.36)

- (4) 作家は言葉において非常に不自由である、その不自由さにおいて、一人ひとりの作家の真価が問われると、ぼくは思います。

(『國學院誌雑』講演録/第 117 巻第 6 号,p.63)

また、「にあって」「からすれば」(付録 1 を参照)は『國學院誌雑』座談会にしか出現しない、『國學院誌雑』インタビュー、『國學院誌雑』講演録とも用例が見られない。また、『國學院誌雑』講演録しか用例が見られないのは「に際して」、『國學院誌雑』インタビューしか用例が見られないのは「から見て」「に至るまで」「によると」「からして」「からいって」で、「にあたって」は『國學院誌雑』インタビュー、『國學院誌雑』講演録とも用例が見られるが、『國學院誌雑』座談会には出現していない。

「にあって」については、特別な事態や場所において、また「で」「に」という意味で使われているが、「～で」や「～において」よりも硬い表現であるため、本人の発話が修正されている可能性はあるがあえてフォーマルな硬い表現が使用されていると思われる。いずれもその立場で考えたり、判断したりする表現である。

- (5) 古代の論争はむしろそちらにあって、生命原理として共通して理解されていたのだと私は思うのです。

(『國學院誌雑』117 巻 2 号・座談会 p.49)

- (6) 「生ける自然」にあっては、生物の生まれてくるあり方を「自然」の生成変化になぞらえて

(『國學院誌雑』117 巻 2 号・座談会 p.52)

- (7) 自分で言っていることに反しているようですがそうした時代にあって、生命現象、生命原理を心の概念に含めるのは努力のいる仕事だとも一方では思っています。

(『國學院誌雑』117 巻 2 号・座談会 p.60)

6.3 他の(国学院雑誌以外の)資料で見られるもの

次に、その他の資料と比較すると、【表 3】から『The KPUM TIMES』『大学時報』『言語文化教育研究』『創成』『大学時報』に掲載されている座談会について、出現頻度は『大学時報』、異なり出現数は『創成』が最も多く見られる。『言語文化教育研究』に最も出現している格助詞性複合辞は「によって」、そのほかの資料には、「について」が最も見られる。また、『大学時報』には他に「に関して」「に対して」も多く出現している。下にその用例を示す。

- (8) 授業に関しては、オンデマンド型を取り入れたことで聴き逃した箇所や大事な箇所を

復習できるようになり、学習効果が高まったと思います。

(『大学時報』2023年9月掲載・p.21)

- (9) また、今後起こり得るであろう感染症の発生や災害に対して、大学全体をどう管理していくかということを、今回のコロナ禍の教訓として考え、危機管理意識の向上につなげていきたいと思います。

(『大学時報』2023年9月掲載・p.26)

6.4(国学院雑誌の)座談会に見られるもの

【付録1】に示すように、「によると」「からして」「からいって」「に至るまで」は座談会に出現していない。これに対して、「にあって」「からいえば」「からみると」は座談会にのみ出現している。また、【付録1】【付録2】から、「からすれば」は『國學院雑誌』の座談会と『大学時報』の座談会にしか出現していない。以下にその用例を示す。

- (10) このような脳・身体・環境の実相からすれば、認知活動・心のはたらきも身体化されて状況や環境に埋め込まれています。

(『國學院誌』117巻2号・座談会 p.43)

- (11) これはもしかするとお三方からすればもう当たり前のことで、昔から言われていることかもしれませんが、私自身としては少し心強い味方を得たような気持ちにもなっています。

(『國學院誌』117巻2号・座談会 p.56)

- (12) それはベトナムで教えていたんですけど、やっぱり、私からすれば授業やっているんだから、授業を作るのは、半分は私で、半分は学生だと思っていたんですね。

(『言語文化教育研究』第6巻・座談会 p.69)

「からすれば」については、丁(2020)では、聞き手を納得させるように客観的な場面、またある物事から導き出される結論を述べる場面ではよく使われると述べている。座談会のような原稿などの存在が想定しにくい場面では、客観的な根拠のもとに聞き手を納得させる結論を述べる際に、「からすれば」を用いることを想定できると思われる。

学術雑誌に掲載される座談会は学術的な話題を複数で対談することにより、学術的内容が話し言葉で表現されるため格助詞性複合辞についても学術論文とは異なる傾向が見られる可能性がある。

6.5 その他(丁寧形を含むもの)

また、格助詞性複合辞丁寧形について、改めて中納言で検索すると、「にあたりまして」「としまして」「国会会議録」に多数(「に当たりまして」は389例、「としまして」は480例)出現していた。しかし、丁(2023)によれば、学術論文においては格助詞性複合辞丁寧形の使用が見られない。また、学会データ CSJ も利用して格助詞性複合辞丁寧形「に当たりまして」「としまして」を検索すると、「会議・会合」に「としまして」1例しか見られない。これに対して、以下の用例(13)(14)(15)に示したように、『國學院雑誌』座談会、講

演録には3例見られる。以上のことから、格助詞性複合辞丁寧形はフォーマルなアカデミックな場面のうち書き言葉の資料では、ほとんど見られないのに対して、話し言葉の資料では多少は見られることが指摘できる。

(13) 最初に当たりまして、こんなことを申し上げたいと思います。

(『國學院雑誌』116巻1号・座談会 p.295)

(14) 学校教育以外の機関としましては、日系団体が経営する日本語学校、民間の外国語学校、大学における公開講座などがあります。

(『國學院雑誌』119巻4号・講演録 p.29)

(15) 日系団体運営の日本語学校の特殊性としましては、次のようなことが言えるのではないかと思います。

(『國學院雑誌』119巻4号・講演録 p.30)

6.6 今回の対象資料には見られないもの

書き言葉における格助詞性複合辞の使用状況に注目した丁(2023)では、『日本語教育』『國學院雑誌』『日本語の研究』のいずれも「について」が最も見られると指摘しており、本研究の『國學院雑誌』座談会と『國學院雑誌』インタビューにおける使用状況と同様の傾向を示している。しかし、学術論文における格助詞性複合辞の異なり語数は、『日本語教育』11、『國學院雑誌』11、『日本語の研究』10である。本研究で扱ったデータでは、『國學院雑誌』の座談会22、インタビュー20、講演録16であり、いずれも学術論文より多い。

丁(2023)では、『日本語教育』『日本語の研究』『國學院雑誌』の3誌のいずれにも見られない格助詞性複合辞は「からいって」「にかけると」「(の)折から」「でもって」「によったら」「によらず」の6語であると述べている。これに対して、『國學院雑誌』の座談会、インタビュー、講演録、および『The KPUM TIMES』『大学時報』『言語文化教育研究』『創成』『大学時報』に掲載されている座談会のいずれにも出現していない格助詞性複合辞は「によれば」「によったら」「によらず」「につき」「につけ(て)」「にかけると」「にわたって」「から言う」と「でもって」「ところの」「(の)折に」「(の)折から」「にして」の13語である。どちらにも出現しない語は「によったら」「によらず」「にかけると」「(の)折から」「でもって」の5語である。このことから、学術論文より、今回の話し言葉に寄っている資料は格助詞性複合辞の種類が多い。口語的な「でもって」「によったら」のような格助詞性複合辞は学術的な文章のような書き言葉にも座談会、インタビューのような話し言葉においても使用されにくい傾向がある程度見られることが指摘できるのではないかと考えられる。

7. まとめと今後の課題

7.1. 今回の傾向

本研究は、日本語母語話者による座談会、インタビュー、講演録データにおける格助詞性複合辞についての量的研究である。結果は以下の通りである。

- i. 格助詞性複合辞の出現率について、『國學院雑誌』座談会、『國學院雑誌』インタビ

ューには「について」が最も多く出現している。『國學院雑誌』講演録、『言語文化教育研究』には「によって」が最も多く見られる。

- ii. 異なり出現数について、『國學院雑誌』の座談会が多く見られる。また、座談会・インタビュー・講演録は学术论文より異なり語数が多い。
- iii. 『國學院雑誌』での調査では、「にあって」「からすれば」は『國學院雑誌』座談会、「に際して」「をめぐって」は『國學院雑誌』講演録、「に至るまで」「によると」「からして」「からいって」「からみて」は『國學院雑誌』インタビューにのみ見られる。

以上から、講演録では、文の構造が比較的整っており、論理的・抽象的な話題が多いため、格助詞性複合辞が多く使われる。また、話し手が自身で文を整えることが多いため、文の組み立てが書き言葉に近く、形式張った表現が出やすい。インタビューでは、質問に答える形で、ある程度構成された話し方になるため、論理的な複合辞も出やすいが、話し手の話し方の癖や専門性に影響を受ける可能性がある。また、読者にとって未知の世界や視点を紹介するため、書き言葉的な表現が多いので学术论文の傾向に近い。さらに、相手の存在を強く意識するので、「からして」「からいって」「からみて」などの主観的視点の複合辞が多くなる傾向が認められる。それに対して座談会では、話題が頻繁に移り、自然な談話に近い言い回しが多く、形式的な複合辞はあまり使われていない。

また、本研究の調査対象に出現している格助詞性複合辞の異なり語数は丁(2023)より多いが、丁(2023)では、「からすれば」「からみると」は『日本語教育』に、「にあって」は『日本語の研究』に出現していない。本研究での調査では、「にあって」「からすれば」「からみると」などの出現が見られるが、僅かにみられる格助詞性複合辞の語彙の偏りについては発言者の個人的な語彙の好みによる選択の影響の可能性もあるのではないかと考えられる。相手の存在を強く意識するので、「～にとって」「～として」などの主観的視点の複合辞も多くなる傾向。複数人による対話なので、主観的・対人的表現（～にとって、～からすると）も時々見られるが、基本的には砕けた表現が多い。

7.2.文体差について

また、座談会・インタビューと学術講演会とで格助詞性複合辞の出現状況の相違については、資料の性格として、学術講演会では講演資料や原稿をもとにしてそれを話ことばにして講演する可能性があるのに対して、座談会・インタビューについては原稿などの存在が想定しにくいことが考えられる。しかし、どちらの場合も言語資料として作成・掲載されているわけではないので、雑誌に公開されるまでの段階で加筆・削除を含む校正によって「座談会・インタビューらしい文体」「学術講演らしい文体」に整えられている可能性がある。両者に文体の違いがあるとすれば、今回の調査対象外である文末指定時や終助詞などに出てくる可能性がある。たとえば、司会者とゲスト、聞き手と話し手など複数の話者や出席者による対話形式の座談会・インタビューでは文末に準体助詞「の」が撥音化した話し言葉的な「んです」が座談会に7例、インタビューに46例、「んでしょう」イ

ンタビューに1例見られるのに対して講演者が聴衆に対して1人で発話する講演録でも「んです」が93例見られともに多用しているといえる。

しかし一方で、終助詞「よね」を伴う「ますよね」は座談会に5例、インタビューに7例見られるのに対して講演録では1例しか見られず、語彙語法によっては座談会・インタビューと講演録とで文体差がある可能性が指摘できる。このような文体差が格助詞性複合辞における使用状況の相違に影響しているのではないかと考えられる。文体差の分析については本研究の直接的な目的ではないため、今後の課題とする。

また、本研究の調査では、格助詞性複合辞丁寧形「としまして」は、講演録に2例しか見られないが、2例とも同じ講演者により使われており、僅かにみられる格助詞性複合辞の語彙の偏りについては発言者の個人的な語彙の好みによる選択の影響の可能性もあるのではないかと考えられるが、これについても今後の課題とする。

7.3.日本語教育的な観点から

学術的な座談会に用いられる日本語は、発言者・編集者によって文として整えられた可能性があり、話し言葉の実態そのものを反映する資料ではない。しかしながら、学習者にとっては学術的でしかも理解しやすい話し言葉の資料として有効であると考えられる。ここに日本語教育の現場において書き言葉における運用だけではなく、学術的な座談会などの場面における使用も導入する意義が認められるのではないかと考えられる。その準備段階として、座談会に用いられる複合辞の実態を把握する必要がある。その上で、一まとまりのものとして理解し、特に学習上、効果的な格助詞性複合辞について検討していくことが重要であると考ええる。

さらに、出現する格助詞性複合辞のうち、日本語教育の指導上で重要となりうる形式は、例えば論説文や意見文に頻出する意見を表す「について」「に関して」のような形式や、強調を表す「として」「という」「といった」、論理関係を的確に示す「に対し」「によって」などである。使用傾向と上位項目を考察し、日本語教育に反映できれば、日本語学習者の自然な発話に繋げることができ、文脈の中でどの複合辞を用いるのが適切かを検討するような授業展開も考えうるだろう。そこで、日本語教育の分野での研究の蓄積を踏まえつつ、また、さまざまな資料における格助詞性複合辞の使用状況も考慮し、ジャンル別談話スタイルの特徴を把握しながら、格助詞性複合辞の日本語教育の現場での有効な扱い方についてさらに検討を深めたい、レジスターの違い（フォーマル・カジュアル）や、文の構造の学習にも応用可能だと考える。

注

- (1) 格助詞性複合辞は、歴史的・位相的・方言的に膨大な数があるが、本研究では「から すりゃあ」「からいやあ」など話し言葉かつ方言な要素を含む格助詞性複合辞については考察対象外とした。
- (2) なお、松木(1990)は意味機能による分類とは別に、形態による分類も行なっているが、本研究の論述と直接関係しないので、ここでは、それについては紹介しない。

- (3) () は、() 内の要素を付加しなくても可能なことを示す。
- (4) 文字数について、國學院雑誌・座談会は 76623、國學院雑誌・インタビューは 51847、國學院雑誌・講演録は 47739、『The KPUM TIMES』『大学時報』『言語文化教育研究』『創成』『大学時報』5 冊で 74125 である。
- (5) 『國學院雑誌』は 12 冊/年で発行されており、論文、談話室、紹介、座談会、講演録などさまざまな内容が掲載されている。『大学時報』は、大学の先進的な取り組みや高等教育に関する情報を掲載し、年に 6 回刊行されている。「考えるための日本語実践とは何か」は、一般社団法人・言語文化教育研究学会が企画した座談会で、『言語文化教育研究』に収録されている。また、『九大広報』は、主に周辺地域の自治体、高校、企業など学外向け、また、九州大学の教職員、学生を対象とした広報誌である。『The KPUM TIMES』は京都府立医科大学出版している広報誌である。『創成』は東京大学大学院新領域創成科学研究科が刊行している広報誌である。
- (6) Mi (えむあい) は macOS 用のテキストエディタである。1996 年頃に「ミミカキエディット」としてリリースし、現在は「mi」と改称してバージョンアップを続けている。コーディングや、Web ページ作成、原稿書き、レビュー、ログ解析などの作業を支援するテキストエディタである。また、正確に電子化できているかどうか筆者自身で確認した後に分析を行った。
- (7) 今回の調査では、『國學院雑誌』は 1 月号に必ず座談会があり、まれに 11 月特集号にもある場合がある。これに対して、【表 3】に示している他の雑誌では座談会は必ず年に何回発行するではなく、たまに掲載されているので、分量はより少ない。

【参考文献】

- 安祥希(2018)「日本語アカデミック・ライティングにおける 専門分野間の言語表現・表現技法の異同 -言語学分野と文学分野を取り上げて-」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』巻 33,pp.43-60
- 服部匡(2013)「複合格助詞関連形式での丁寧形/普通形の対応関係-コーパスに基づいた研究-」『形式語研究論集』和泉書院 pp.1-18
- 本多由美子(2017)「複合格助詞における丁寧形の機能：『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析」言語資源活用ワークショップ 2017 発表論文集 国立国語研究所学術情報 pp.258-267
- 菅谷有子他(2016)「『理工学系話し言葉コーパス』における複合辞の特徴：中級日本語教材をアカデミックなコミュニケーション能力につなげるために」文教大学『言語と文化』28 巻,pp.1-25
- 丁(2020)「複合辞「からすると」「からすれば」の相違に関する考察—BCCWJ を資料としたコーパス分析—」『国学院大学・日本語教育』11 号,pp.132-145
- 丁文静(2023)「学術論文における格助詞性複合辞の使用実態に関する一考察」『東アジア文化研究』第 8 号,pp.311-326
- 飛田良文他編(2007)『日本語学研究事典』明治書院
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター

紀要』 pp.27-51

森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型:用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

渡辺由貴(2016)「BCCWJ の教科書データにおける複合辞—國語教育を視野に—」『じんもんこ
ん 2016 論文集』 pp.87-94

山崎誠・藤田保幸(2001)『現代語複合辞用例集』国立國語研究所

『日本語学研究事典』(2007)明治書院,飛田良文他編

【調査資料】

- (1) 『國學院雑誌』(國學院大學発行)
- (2) 『The KPUM TIMES』京都府立医科大学発行
- (3) 『九大広報』九州大学発行
- (4) 『言語文化教育研究』一般社団法人・言語文化教育研究学会発行
- (5) 『創成』東京大学大学院新領域創成科学研究科発行
- (6) 『大学時報』一般社団法人・日本私立大学連盟発行

【URL】

國學院大学雑誌『國學院雑誌』

https://k-rain.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=6

京都府立医科大学広報誌『The KPUM TIMES』

<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/newsletter/kouhoushi.html>

九州大学広報誌『九大広報』

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publicity/publications/magazine/>

東京大学大学院新領域創成科学研究科広報誌『創成』

https://www.k.u-tokyo.ac.jp/gsf/sosei/index_2.html

一般社団法人・言語文化教育研究学会雑誌『言語文化教育研究』

<https://alce.jp/journal/bkn.html>

『大学時報』

<https://daigakujihou.shidaren.or.jp>

【付録 1】國學院雑誌における格助詞性複合辞の出現状況

出現形式	國學院雑誌座談会 (文字数：76623)		國學院雑誌インタビュー (文字数：51847)		國學院雑誌講演録 (文字数：47739)	
	出現頻度 (延べ)	出現率	出現頻度 (延べ)	出現率	出現頻度 (延べ)	出現率
について	63	22.34%	27	23.89%	16	17.39%
との	42	14.89%	13	11.50%	12	13.04%
において	39	13.83%	1	0.88%	2	2.17%
によって	34	12.06%	18	15.93%	24	26.09%

といった	24	8.51%	1	0.88%	1	1.09%
にとって	18	6.38%	12	10.62%	14	15.22%
を通して	16	5.67%	8	7.08%	4	4.35%
に対し（て）	14	4.96%	10	8.85%	3	3.26%
に関して	12	4.26%	1	0.88%	0	0.00%
をもって	4	1.42%	4	3.54%	2	2.17%
にあつて	3	1.06%	0	0.00%	0	0.00%
により	3	1.06%	0	0.00%	3	3.26%
からすれば	2	0.71%	0	0.00%	0	0.00%
を通じて	2	0.71%	0	0.00%	3	3.26%
からいえば	1	0.35%	1	0.88%	0	0.00%
からすると	1	0.35%	1	0.88%	0	0.00%
からみたら	1	0.35%	1	0.88%	1	1.09%
からみると	1	0.35%	4	3.54%	0	0.00%
からみれば	1	0.35%	0	0.00%	1	1.09%
をはじめ	1	0.35%	2	1.77%	0	0.00%
に際し（て）	0	0.00%	0	0.00%	1	1.09%
に至るまで	0	0.00%	2	1.77%	0	0.00%
によると	0	0.00%	1	0.88%	0	0.00%
からして	0	0.00%	1	0.88%	0	0.00%
からいって	0	0.00%	2	1.77%	0	0.00%
にあたって	0	0.00%	1	0.88%	3	3.26%
をめぐって	0	0.00%	0	0.00%	2	2.17%
からみて	0	0.00%	2	1.77%	0	0.00%
計	282	100.00%	113	100.00%	92	100.00%

【付録 2】各雑誌における格助詞性複合辞の出現状況

『九大広報』文字数：317			『言語文化教育研究』文字数：251		
格助詞性複合辞	出現頻度	出現率	格助詞性複合辞	出現頻度	出現率
について	7	43.75	によって	6	24.00
との	2	12.50	について	5	20.00
といった	2	12.50	にとって	3	12.00
により	1	6.25	といった	2	8.00
において	1	6.25	に関して	2	8.00
によって	1	6.25	において	2	8.00
からみれば	1	6.25	に対し（て）	2	8.00

にあたって	1	6.25	との	1	4.00
計	16	100.00	からみたら	1	4.00
			からすれば	1	4.00
			計	25	100.00
『創成』文字数：612			『大学時報』文字数：526		
格助詞性複合辞	出現頻度	出現率	格助詞性複合辞	出現頻度	出現率
について	22	42.31	について	14	19.72
との	9	17.31	に関して	12	16.90
にとって	4	7.69	において	11	15.49
によって	3	5.77	との	9	12.68
に関して	3	5.77	に対し（て）	9	12.68
に対し（て）	2	3.85	といった	6	8.45
により	2	3.85	により	5	7.04
を通じて	2	3.85	によって	1	1.41
からみて	1	1.92	にとって	1	1.41
において	1	1.92	を通じて	1	1.41
といった	1	1.92	を通して	1	1.41
からすると	1	1.92	をもって	1	1.41
をはじめ	1	1.92	計	71	100.00
計	52	100.00			
『The KPUM TIMES』文字数：100					
格助詞性複合辞	出現頻度	出現率			
について	6	66.67			
との	2	22.22			
にとって	1	11.11			
計	9	100.00			